第二回 国宝薬師寺東塔 保存修理現場見学会

平成二十四年十一月

主催　奈良県教育委員会

協力　薬師寺

部材の実測

写真撮影

初層内部彩色の応急処置作業（平成 23 年 9 月）

素屋根建設中（平成 24 年 2 月）

素屋根完成（平成 24 年 3 月）

素屋根内部の状況

宝珠・竜舎の解体（平成 24 年 6 月）

水煙の解体（平成 24 年 6 月）

瓦下ろし開始（平成 24 年 9 月）

これまでの保存修理工事の経過

今回の保存修理工事は、薬師寺からの委託を受け、奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所がおこなっています。工事は「解体修理」で、建物を一旦すべて解体し、破損部材の取替または繕いをおこない、長い年月を経て弱くなった箇所に補強を加え、組み立て直します。

修理事業は平成 21 年 7 月に着手し、平成 30 年 12 月に竣工の予定です。総事業費は約 27 億円となる見込みです。

平成 23 年度は、素屋根（すやね）建設に先立ち、剥落の進んだ初層内部彩色の応急処置をおこないました。

現在東塔を覆う素屋根の建設工事は、平成 23 年 9 月より開始し、平成 24 年 3 月に竣工しました。以後解体修理工事が終わる平成 30 年まで、東塔を風雨から守る覆屋として、また修理工事のための足場として使用します。

平成 24 年 6 月、相輪最頂部の宝珠（ほうじゅ）と竜舎（りゅうしゃ）の取り外しを皮切りに、いよいよ東塔の解体修理が始まりました。同月末には水煙を下ろし、9 月からは屋根瓦の解体が始まりました。

瓦下ろし終了後は、木部の解体が始まります。解体と同時に各部材の詳細調査も並行しておこないます。すべての部材の解体が終了するのは平成 26 年度の予定です。

奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所

〒 630-8502　奈良市登大路町 30　tel 0742-27-9865　fax 0742-27-5386

東塔の屋根瓦

薬師寺東塔の屋根は、丸瓦と平瓦を交互に用いて葺く本瓦葺です。建築当初より何度も葺替工事がおこなわれています。最近では昭和27年に修理され、三重各層は新調した瓦で葺き替えられました。一方、裳階（もこし）の屋根は古代や中世など様々な時代の瓦が使用されています。古い瓦を大切にしながら、それらをできる限り再利用していたことがわかります。

屋根瓦の下は、土居葺（どいぶき）と呼ばれる瓦葺の下地があります。昭和27年の葺替工事では、土居葺として野地の上に椹（さわら）の割板を葺き、葺土の土留として横桟を打っています。

平瓦を据えるための葺土は、瓦下全面に置かずに、両側のみ縦2列に置いています。また丸瓦は砂漆喰を用いていました。

棟の先端に据えられている鬼瓦は、室町・江戸・明治時代など、各時代の瓦が使われていました。瓦の大きさ、形、鬼の表現方法など、各時代の特徴があり、同じ時代でも様々な個性豊かな表情が見受けられます。明治の修理時には、全体で36個ある鬼瓦のうち、半数の18個を新調していますが、これらは新薬師寺本堂などで使われている古代様式風の獣面の鬼瓦に倣っています。

今回の解体修理工事では、屋根瓦はすべて取り外し、目視や打音検査などによって破損状況を確認し、再使用が可能かどうか判断します。割れて使えない瓦の代わりには、新しい瓦を製作します。

屋根瓦解体の流れ

解体前

丸瓦と丸瓦下の砂漆喰を外した状況

平瓦を外した状況

↓

葺土を取った状況

屋根瓦と土居葺の関係

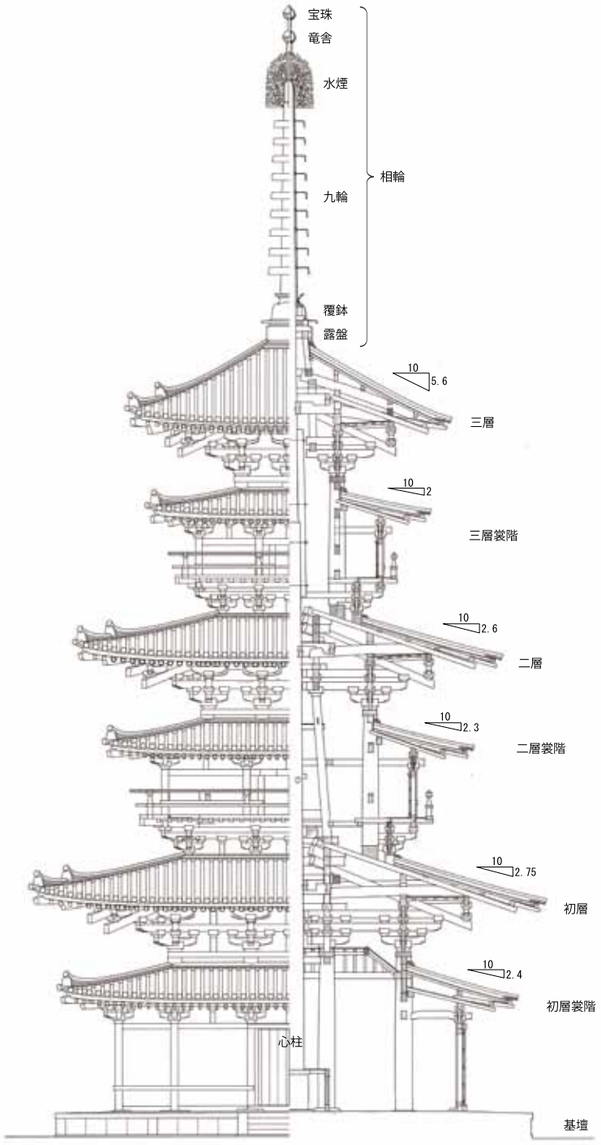
各年代の鬼瓦

左：室町時代末
（初層南東隅）
中：江戸時代
（二層北東隅）
右：明治時代
（三層裳階北西隅）

修理前の東塔

水煙

東塔・各部名称



薬師寺東塔の概要

東塔は、平城京に薬師寺が移った奈良時代より現在まで伝わる薬師寺唯一の建物です。

三重塔の各層に裳階と呼ばれる差し掛けの屋根が取り付く日本には他に例のない様式で、建物の中心には基壇上の礎石から頂部の相輪（そうりん）まで心柱が独立して立っています。

相輪の上部には、飛雲の中に合計24人の天人が舞う水煙（すいえん）があり、東塔を代表する華麗な装飾として有名です。また、初層内部には、既に剥落が著しいものの、創建当初の彩色文様が残存します。

初層内部